国立国語研究所学術情報リポジトリ

文章表現と理解：言語効果の調査法を求めて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 四郎, HAYASI, Sirô メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001704

文章表現と理解

—言語効果の調査法を求めて—

林　　四郎

1　言語効果についてのわたくしの考え

国立国語研究所には，言語効果研究室という研究室がある。わたくしは，そこに属している。この研究室は，マス・コミュニケーションに関する言語を研究することになっているが，わたくしは，マス・コミュニケーションという巨大な現象を対象にすえてかかるよりも，まず，対象はどうあれ，言語を効果の面からとらえ，研究する方法を組み上げることが第一に必要だと考える。

言語を効果の面でとらえるとは，言語をコミュニケーション現象として，動的に観察することにほかならない。だから，言語効果の学とは，すなわち，コミュニケーションの学である。そこで，言語効果学の間口は，一挙にひろがって，マスであろうがパースナルであろうが，ことばによるコミニュケーションのあるところには，つねに言語効果の問題があることになる。そのとおりで，言語効果学は，おそろしく大きな領域をもつ学問である。

「言語効果学」とわたくしはいった。だれもまだこういう学を命名したことはないが，わたくしは，あえてこの語を用いる。言語効果学は生れたばかりの学問である。まだ，その境界もわからず，本体もとらえられていないから，どのように伸びていくかもわからない。わたくしは，ぜひ，ふさふさとしたみがなるまでに，この学問を伸ばしたいと考える。

わたくしは，自由な考えをもって言語効果の学にのぞみ，まず，直観的に，ここに一つの問題があると考えた点からぶつかろうと思う。

2　一つの小調査の報告

わたくしは，まず，自分の興味に従って，文章表現と理解の問題をさぐるこ

とにする。そして，その探求を，一つの小さな調査から始める。文章表現と理解ということも，また大きな問題であるが，今回は，三つの点に視点を定めた。それは，

(1) 修飾語と文構造の問題

(2) 接続語の問題

(3) 語の抽象の問題

である。そして，問題をすべて言語発達との関係でとらえたいと思ったので，調査は，小学校の各学年児童について試みた。調査した学校は，東京都の千代田区立九段小学校と成蹊大学付属成蹊小学校とである。調査はペーパーテストであるから，1年生は無理と思い，九段小では2年以上としたが，成蹊小では，1年生もやってみた。昭和33年の9月，10月に実施した。

以下，この調査の報告をしながら，言語効果の研究法にふれていくが，紙数の関係で，視点(1)の考察結果だけを述べ，(2)以下についての報告は別の機会にゆずる。調査後の時日が短いので，結果の整理はまだ終っていない。整理も，第一次的な，きわめて早い段階のものであることをことわっておく。

3 修飾語と文構造の問題

ペーパーテストではあるが，半分は口問筆答の形式をとった。わたくしが問題文を読み，答えを紙に書かせた。読みかたは，ラジオのニュースよりはゆっくりで，1回だけとした。

修飾語と文構造の問題というのは，リーダビリティー(注)のほうで，センテンスの長さを問題にするのと似ているが，彼においては，もっぱら量的に観察するのを，これにおいては，問題をもとの質的な観点にもどしている。

注　主として，アメリカのルードルフ・フレッシュが研究し，読みやすさの尺度を作った。基準は，①センテンスの長さ，②接辞（affix）の数，③人称語の数の3点に置かれた。ただし，同じくアメリカのデイルは，この基準の②③を批判して，それらよりも，語の基本度が問題だとして，わかりやすい語の語彙表を作った。わが国では，堀川直義氏や，森岡健二氏が，この問題の研究家として知られている。今のところでは漢字の含有率とセンテンスの長さが基準と考えられている。

国語においては，修飾語，特に連体修飾語は必ず被修飾語の前に位置するか

ら，修飾語を大きくすると頭でっかちになり，何がどうしたという中心思想を簡潔に述べることができなくなる。（結局，センテンスが長くなる。）しかし，新聞などのように字数を制限されると，同じ語の反復をさけるために，とかく修飾語に頼りがちになる。そこで，そういう頭でっかちの文章が，実際，受け手の理解をさまたげるかどうかを調査した。

問題を，二つに分けた。

(1) 指示・解説的な文章の解説や指示に受け手が従いうるかどうか。

(2) 文章内容が，受け手にどんな印象をもって受け取られるか。

第１の問題に，また二つの問いを用意した。一つは，おり紙作業，一つは算数の問題とした。

第２の問題には，三つの問いを用意した。一つはニュース文の聞き取り，次は生活文の聞き取り，今一つは解説文の聞き取りとした。

おり紙作業の問題（読み取り）

〔ま四角な紙をくばって〕

第１種

ましかくの　かみを　二つに　おります。すると，ながしかくに　なります。それを　また，二つに　おります。小さな　ましかくが　できます。かみを　ひらきましょう。かみに，たてよこに　おりめの　すじが　できて　いるでしょう。この　すじを　えんぴつで　たどって，せんを　ひいて　ください。

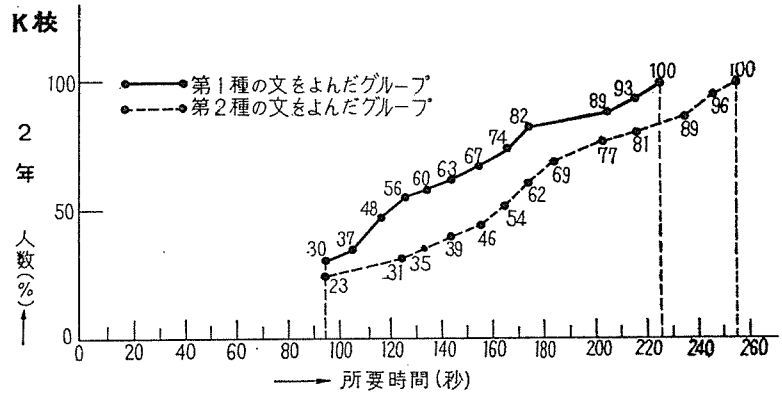
これを，修飾語の大きい文にして

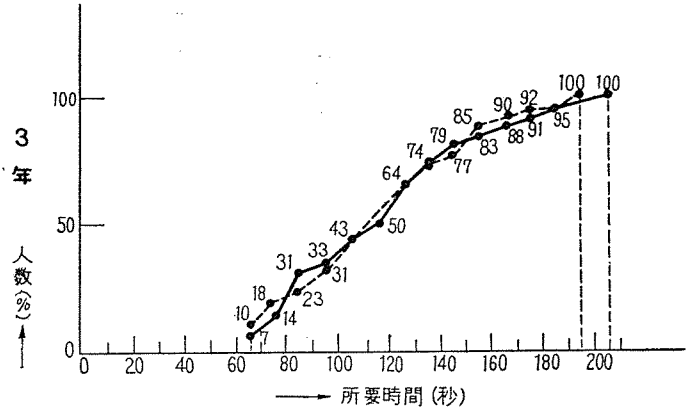
第２種

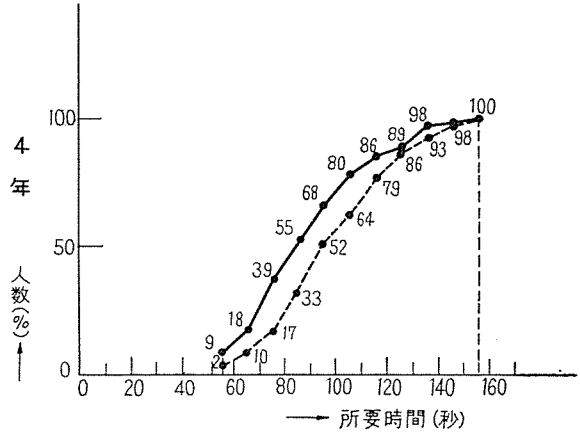
二つに　おって　ながしかくに　なって　いる　ましかくの　かみを　小さな　ましかくに　なるように，また　二つに　おって　ひらくと，できて　いる　たてよこの　おりめの　すじを　えんぴつで　たどって，せんを　ひいて　ください。

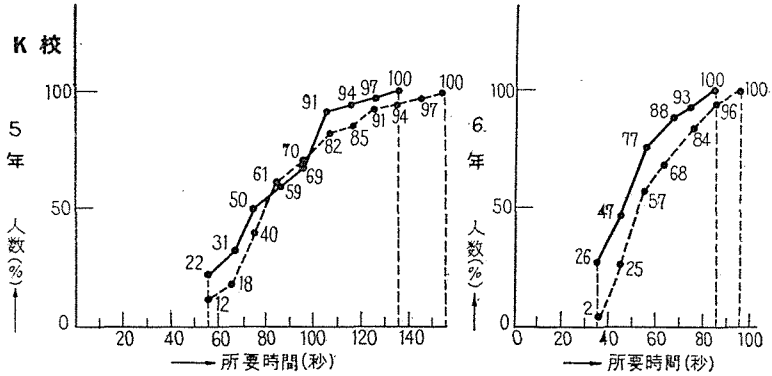
九段小学校（以下Ｋ校と呼び，成蹊小学校をＳ校と呼ぶ）では，両種の問題を大体等数になるように，ランダムにまぜて配った。Ｓ校では学級によって第１種と第２種とを分けた。

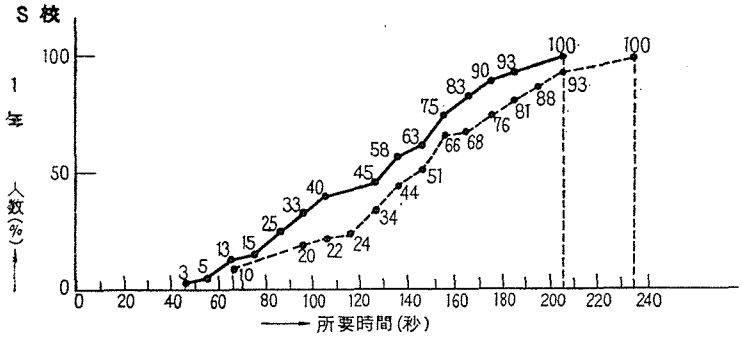
各人が作業完成までに要した時間を測り，10秒ごとに人数を集計して，累積

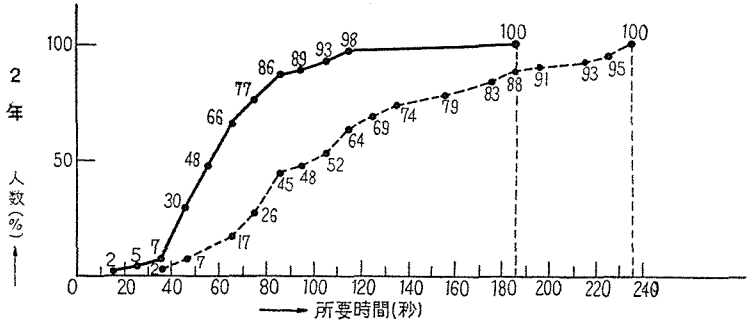

K校
2年
第1種の文をよんだグループ
第2種の文をよんだグループ
人数(%)
所要時間(秒)

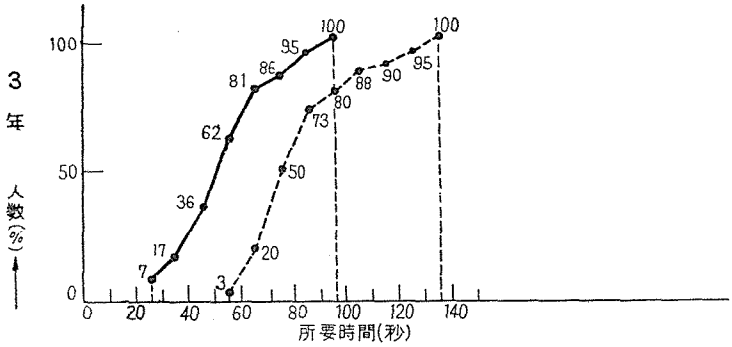

3年
人数(%)
所要時間(秒)


4年
人数(%)
所要時間(秒)

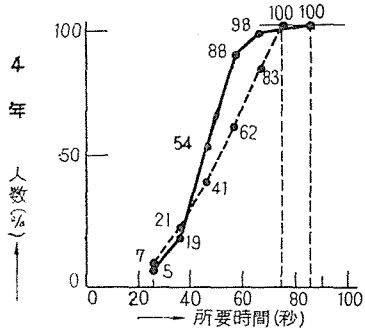

K 校
5 年
6 年
人数(%)
所要時間(秒)

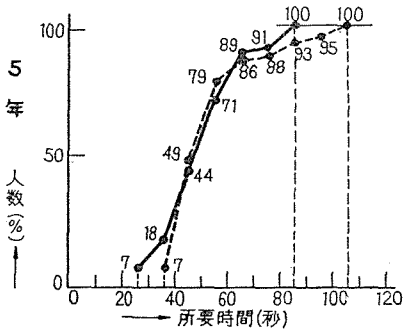

S 校
1 年
人数(%)
所要時間(秒)

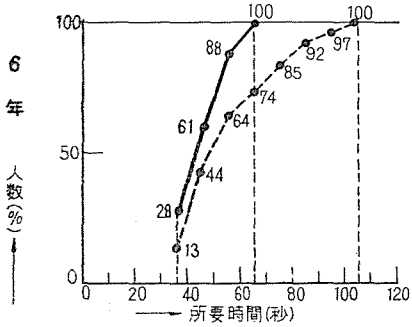

2 年
人数(%)
所要時間(秒)



S 校







相対度数分布表にした。グラフで，そのグループの何%の児童がそこ（黒点から垂線をおろした所の秒数）までの時間で作業を完成したかがわかる。

K校の結果では，3年は全く両線がからみ合っているが，その他の学年では，わずかながら，第1種組が先行している。大体10秒の差があるようだ。学級の差が出てはいけないので両種の問題を混配したのだが，もしかしたら，そのため，ひとのできぐあいにつられてもっとあるべき差がちぢまったかもしれぬと思い，S校では学級別をしてみた。S校では，下学年において，かなり著しい差が出た。2年生では，児童の50%が作業をおえるまでで40秒以上，80%がおえるまででは80秒の大差がある。（これほどに開くと，学級の能力差が問題になる）上学年においては，この差はなくなるが，それでも，おそい方の一，二の児童は，修飾語の大きい文章の抵抗をまだ克服できないでいるように思われる。

算数の問題（聞き取り）

K校では

第1種

> 花子さんは　え本を　7さつ　もって　いました。そこへ　お母さんに　3さつ　買って　いただきました。　そのうち　1さつ　なくして　しまいました。今　何さつ　もって　いるでしょう。

に対して，修飾語の長いの（**第2種**）は

> え本を　7さつ　もって　いて，お母さんに　3さつ　買って　いただいたのに，1さつなくして　しまった　花子さんには，今，え本が　何さつ　あるでしょう。

これは聞き取りだから，両種混配のようなやりかたができず，学級による組別となった。組別の正答率は次のようである。（どの学年も，第1組が第1種第2組が第2種の文を聞いた。表中では第1種の文に当った方の組をゴシック活字で印刷した。以下すべてそのとおりである。数値はみな%）

K校	学年	2		3		4		5		6	
答	組	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2
正　答		**97**	63	**90**	79	**91**	85	**88**	94	**98**	91
誤　答		**3**	30	**10**	21	**7**	11	**12**	6	**2**	9
無　答		**0**	7	**0**	0	**2**	4	**0**	0	**0**	0
計 %		**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100
(実人数)		**(30)**	(27)	**(39)**	(43)	**(44)**	(46)	**(34)**	(35)	**(43)**	(46)

2年ではかなりの差があるようだったが，これは，学級の能力差らしかった。なぜなら，K校では，2年までは出生順位による学級分けが保たれているので，第2組は第1組に比べてややおさない。それは，他の問題にもはっきりとあらわれていた。2年を除くと，あとは両組の正答率に違いらしい違いはない。5年などは逆である。問題がやさしすぎて，この程度の文章表現の違いは問題にならないのである。それで，S校では，すこしむずかしくした。

第1種

> 花子さんは　本を　8さつ　もって　いました。そこへ　おかあさんに　3さつ　買って　いただきました。おとうさんも　2さつ　買って　くださいました。そのうち　1さつ　なくして　しまいました。今，何さつ　もって　いるでしょう。

第2種

> もって　いた　8さつの　本の　上に，おかあさんに　3さつ　買って　いただき，お父さんも　2さつ　買って　くださったのに，1さつ　なくして　しまった　花子さんには，今，本が　何さつ　あるでしょう。

結果は，つぎのようになった。

S校	学年	1		2		3		4		5		6	
答	組	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2
正　答		**36**	39	**73**	52	**64**	58	**95**	57	**85**	65	**83**	80
誤　答		**52**	48	**27**	43	**36**	40	**5**	43	**13**	33	**17**	18
無　答		**12**	13	**0**	5	**0**	2	**0**	0	**2**	2	**0**	2
計 %		**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100
(実人数)		**(42)**	(44)	**(45)**	(42)	**(42)**	(43)	**(43)**	(44)	**(46)**	(43)	**(42)**	(40)

有意差のことはいわないが，２年，４年，５年では，一応の差があるように見える。６年では，もはや問題にならない。（１年で差がないのみか逆転さえしているのはわからない。学級の能力差ということも，他の問題から見ていえそうにない。）

問題をややむずかしくしたことによって，文章表現上の抵抗があらわれたといえるかどうか，しかとはいえないが，どちらかといえば，その傾向があるとはいえそうだ。

ニュース文内容把握の問題（聞き取り）

第１種 は

> アメリカの　ミズーリ川の　川原の　あれ野で　歩けなくなって　いた　おじいさんが　１か月ぶりに　すくい出されました。この　おじいさんは，ドレフスという　66歳に　なる　人で，８月の　はつかに　ミズーリ川の　川原に　ひとりで　遠足に　いきましたが，けいれんを　おこして　歩けなく　なって　しまいました。
>
> １か月間，ドレフスさんは　毎日　川の水を　のんで，近くの　木や　草を　ひろって　きては，火を　もしつづけて　いました。
>
> ドレフスさんを　たすけたのは，この　川原に　自転車で　旅行に　来た　人たちでした。だれも　いない　はずの　川原に，煙があがって　いるので，何だろうと　思って　行って　みたら，そこに，おじいさんが　死にそうに　なって　倒れて　いたのです。

第２種 は

> アメリカで，８月の　はつかに，ミズーリ川の　川原に　ひとりで　遠足に　行った　ドレフスという　66歳に　なる　おじいさんが　けいれんを　おこして　歩けなく　なって　しまい，それから　１か月間，毎日　川の水を　のんで，近くの　木や　草を　ひろって　きては，火を　もしつづけて　いたのですが，とうとう　川原の　あれ野で　死にそうに　なって　倒れていた　ところを，ミズーリ川の　川原に　自転車で　旅行に　来て，だれも　いない　はずの　川原に　煙が　あがって　いるので，何だろうと　思って　行ってみた　人たちが　見つけて，ドレフスさんを　１か月ぶりで　すくい出しました。

固有名詞の出現回数や位置が，あまり違っては，問題が文構造から離れてくるので，なるべく違えないように心がけて作文した。

この問題文を読んで聞かせたのち，次の質問をした。

(1) どこで　おこった　じけんですか。

(2) だれと　だれが　でてきましたか。

(3) みじかく　いうと　だれが　どうした　ということですか。

（設問はプリント）

この答えの観察に，わたくしは，一種のキー・ワード(Key Word) 方式(注)をとった。

注　キー・ワードは，文字通りには，一文の中心になる重要な語をさすのであるが，特別に，アメリカのハロルド・ラスウェルなどの政治社会学者がキー・ワードをキー・シンボルとして利用し，一つの社会調査の方法を作り上げた。一時代，一社会の傾向や方向をささえるような重要な語をキー・ワードと認定し，主としてマス・コミュニケーションの面で，それらの語が現れる現れかたを，ある期間にわたって測定するのである。わが国でも，池内一氏や加藤秀俊氏などが，この方法で調査を行っている。

わたくしがここでキー・ワードというのは，注記したような重い意味のものでなく，それぞれの場面における人々の意識の広がりをささえているいくつかの観念を，いくつかの語に求めたものである。キー・ワードを認定したら，グループごとに，どの語にどれだけの集中がなされているかを見る。つまり，応答者が文として記述した答えを，キー・ワードとした語に視点を定めて語別の度数を測るのである。これをあとから再構成すると，グループ全体としての意識の広がりと深さとがつかめるであろう。設問の(3)で特にこの方法をとった。

設問(1)（どこで起った事件か）の応答分析の結果は次のようになっている。これは，例えば「アメリカのミズーリ川のほとり」と答えてあれば，これを「アメリカ」「〜川」「ほとり」の3語に分けて集計した結果である。S校だけの集計結果を示す。第1組が第1種，第2組が第2種である。表中の数値は，各組の人数を100とした%をあらわす。例えば，1年1組は42人いるが，これを100人とすれば，そのうち14人の答えの中に「アメリカ」という語があったわけである。

学　年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		全体	
組	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
実人数	42	44	45	42	42	43	43	44	46	43	42	40	260	256
率化の基準	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
アメリカ	14	43	23	36	52	56	44	32	61	63	36	47	39	46
川	21	48	22	10	14	7	21	11	12	9	21	15	18	17
みずうみ	12	11	22	2	5	2	16	7	4	19	10		12	7
～川	7		7	19	12	14	14	14	46	35	45	58	22	23
川　原		11	18		12	2	21	11	20	23	21	20	15	11
池					5								1	
そ　ば	2	2	16	2		9	5	2	4	2	2		5	3
へ　り	2		2				5	2			2	3	2	1
ほとり					2	5	2	2	12	9	21	15	6	5
き　し					5		2		2	2			2	
ふ　ち												8		1
近　く							2	2	2			3	1	1
合　計	60	116	111	69	107	93	132	84	161	163	159	167	124	115

これによると，全体的には，「アメリカ」あるいは「川」という，単純でばく然としたとらえかたから，次第に「アメリカの～川のほとり」のような，限定された答えになっていく様子がわかる。「みずうみ」という答が多いのは，「ミズーリ」を「みずうみ」と聞いたためである。「～川」としたのは，「ミッシッシー」「いずみ川」だとか，はては「アラフスト川」「ユリウス川」など珍妙な川がたくさん出たのを，一つにくくったためである。

そこで，第1組と第2組のちがいだが，記された語の数の総計からみると，まちまちで，問題文による差は問題にできない。

設問(2)（だれとだれが出てきたか）の答えではどうか。

「ドレフス」としてあるのは，「ドレフス」（実際にこう聞き取ったのは少ない。「ドレクス」「ドレス」「ストレス」など様々）と名を書いたにしろ「おじいさん」と書いたにしろ，ともかく老人をさしたものの数，「旅行者」は「自転車旅行の人」から「旅行者」単に「助けた人」まで，一応それらしい人物をあげてあれば入れてかぞえた数。

学　年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		全体	
組	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2
実人数	**42**	44	**45**	42	**42**	43	**43**	44	**46**	43	**42**	40	**260**	256
率化の基準	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100
ドレフス	**52**	45	**87**	19	**74**	74	**95**	61	**98**	81	**100**	98	**85**	63
旅行者	**24**	12	**71**	10	**52**	56	**84**	43	**96**	70	**100**	90	**72**	46
合　計	**76**	57	**158**	29	**126**	130	**179**	104	**194**	151	**200**	188	**157**	109

全体の数では，3年の逆転を除くと，まず，第1組のほうがかせいでいる。そして，「ドレフス」と「旅行者」とでは，いくらか「ドレフス」のほうが多く出ているのだが，その差は，第2組のほうが，すこしずつ多い傾向がある。

設問(3)（だれがどうしたのか）の答えはどうか。

学　年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		全体	
組	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2	**1**	2
実人数	**42**	44	**45**	42	**42**	43	**43**	44	**46**	43	**42**	40	**260**	256
率化の基準	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100	**100**	100
ドレフス	**21**	11	**69**	16	**69**	56	**93**	36	**98**	72	**100**	98	**75**	48
*川	**5**		**22**	5	**26**	12	**40**	18	**54**	30	**48**	65	**33**	21
ひとりで			**13**		**12**	12	**7**		**13**	14	**12**	13	**10**	5
**遠足に	**2**		**29**		**14**	14	**21**	7	**30**	19	**26**	23	**21**	10
***けいれん	**7**	5	**16**	2	**29**	28	**58**	9	**61**	48	**64**	73	**39**	27
****歩けなく	**2**		**27**	2	**21**	12	**40**	18	**41**	33	**43**	35	**29**	16
水を飲み			**2**			5	**14**	5	**17**	12	**12**	25	**8**	7
木草を拾い							**7**	2	**7**	9	**7**	10	**3**	4
火をもし			**2**				**9**		**7**	7	**12**	15	**5**	4
1か月間			**9**		**2**		**12**	11	**26**	33	**19**	35	**12**	13
くらした			**9**				**7**	2	**15**	2	**7**	25	**7**	5
死にそう	**7**		**2**			12	**16**	14	**15**	12	**24**	30	**11**	11
旅行者			**13**		**17**	16	**26**	14	**39**	23	**45**	48	**23**	16
*****助けた		2	**18**		**24**	14	**35**	23	**50**	44	**57**	55	**31**	23
合　計	**45**	18	**231**	26	**214**	179	**384**	159	**474**	358	**476**	545	**306**	210

*　「川」には「～川」「みずうみ」「川のほとり」等を含む。

**　「遠足に」には「旅行」「遊びに」等を含む。

***　「けいれん」には「病気」「足が動かなく」「いけいれん」等を含む。

****　「歩けなく」には「動けなく」「帰れなく」「倒れ」等を含む。

*****　「助けた」には，「助けられた」「助かった」を含む。これは「旅行者」に「旅行者が」と「旅行者に」とが含まれているのと呼応する。

6年生は，総数からいっても，分布のわりあいからいっても，第1，第2組の間に何の違いもない。すなわち文章表現上の抵抗を全然感じなかったわけである。しかし，その他の学年では，いくぶんずつ，または大きく，第1組がリードしている。

生活文の内容把握の問題（聞き取り）

第1種

わたしたちの　学級には，学級日誌の　ほかに，もうひとつ　日誌が　ある。これは　自由日誌と　よばれている。1学期の　中ごろ，反省会のとき　ある人が　こんな　発言をした。日直の　仕事は　2か月に　3回ぐらいしか　回ってこない。だから，日直で　ないとき，気がついて　書きたいと　思う　ことが　あっても，書けないというのだ。この　発言が　もとに　なって，だれもが　いつでも　書ける　自由日誌が　できたのである。

第2種

わたしたちの　学級には，学級日誌の　ほかに，もうひとつ　日誌が　ある。これは，2か月に　3回ぐらいしか　日直の　仕事が　回っていないから，日直でないとき　気がついて　書きたいと　思う　ことが　あっても　書けないという　発言が　1学期の　中ごろ，反省会のときに　ある人から　出たので　それから　考えて，だれもが　いつでも　書けるように　自由日誌と　名づけて　つくった　ものである。

この質問は，

(1)　わたしたちの学級には，学級日誌のほかに，どんな日誌がありますか。

(2)　これは，どうしてできたのですか。

の二つ。この第2問の答えを，同じ方法で分析したのが次の表である。

今度は，第1組と第2組の配合を変えて，第1種の文を第2組へ，第2種の文を第1組へ配した。（2年以下は，学級日誌の存在を知らないので，この問題は3年以上に限った。）

記された語の総数でみると，今度は，少差ながら第2組がリードしている。これは，差があるといえるような開きではないが，前の問題では，どちらかといえば第1組がまさりがちであった事実から見ると，やはりここに，何か，変

学年	3年		4年		5年		6年		全体	
組	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
実人数	42	43	43	44	46	43	42	40	173	170
率化の基準	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
日直は	12	12	23	27	45	33	31	65	28	34
*～回しか	19	21	23	36	50	49	64	73	39	44
まわってこない	5	16	21	30	48	35	62	60	34	35
学級日誌には	2	9	16	16	4	19	38	25	15	17
日直でないと	7	14	16	18	22	26	31	48	19	26
書きたくても	5	9	21	27	41	37	38	63	27	34
書けない	7	14	35	39	37	49	59	78	12	44
だれもが	7	5	7	14	17	37	36	28	17	21
いつでも	2	0	5	2	13	28	33	25	13	14
気がついたことを	2	9	7	9	13	16	12	20	9	14
自由に	2	0	9	9	9	9	17	20	9	9
書けるように	5	9	16	25	26	49	59	48	27	32
**1学期の中ごろ	5	0	14	2	9	5	21	25	12	8
反省会で	17	7	21	18	13	14	29	38	20	19
ある人が	10	12	19	16	15	26	19	48	16	25
発言した	10	9	16	18	24	19	43	40	23	21
合計	117	147	270	327	387	450	593	700	342	395

* 「～回しか」には「2月に3回」のほか，「1月3回」「3月に1回」等々いろいろの記憶ちがいの回答も含む，その他「なかなか」「あまり」等も含む。

** 「1学期の中ごろ」には「1学期」「1学期のおわり」「2学期の中ごろ」「6月」等をも含む。

その他，ここにあげたキー・ワードはいずれも代表形で，これらに相当するいろいろな言い回しを含んでいる。

化をもたらす要因が文章表現にひそんでいるのではないかと推測することができるだろう。

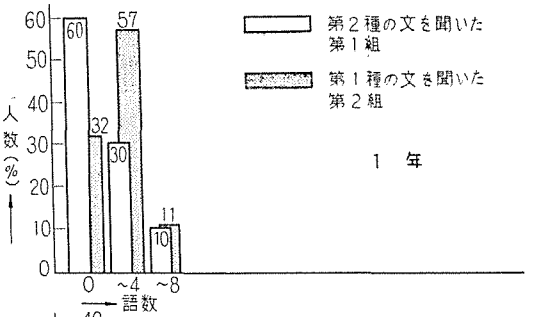
解説文の内容把握の問題（聞き取り）

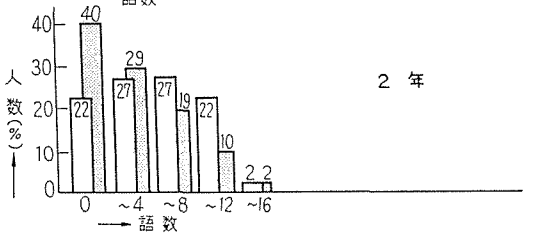
第1種

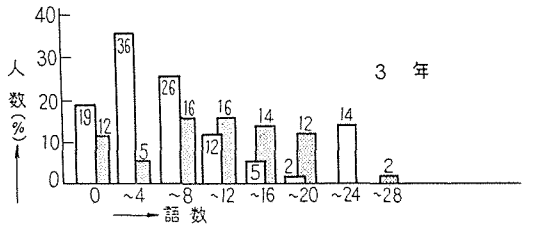
世界には，およそ　2万種類の　チョウが　います。日本には　2百種類いますから，約百分の1です。チョウの　種類も　はじめは　ごく　わずかでした。それが　まわりの　環境が　うつりかわるに　つれて，チョウも　すこしずつ　かわって　いきました。そして　今のように　たくさんの　ちがった種類が　できたのです。

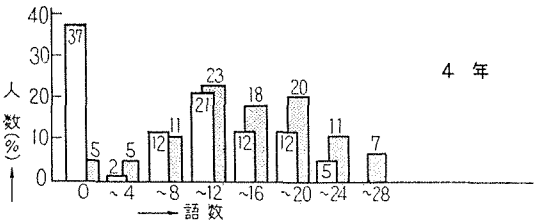
第2種

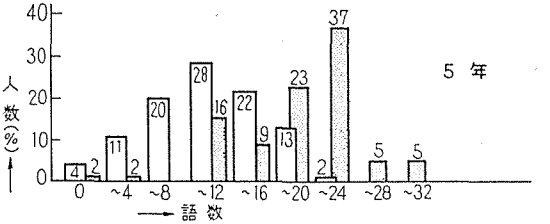
世界で　およそ2万種類，日本に　その約百分の1の　2百種類が　いる　チョウは，うつりかわる　まわりの　環境によって，はじめは　ごく　わずか

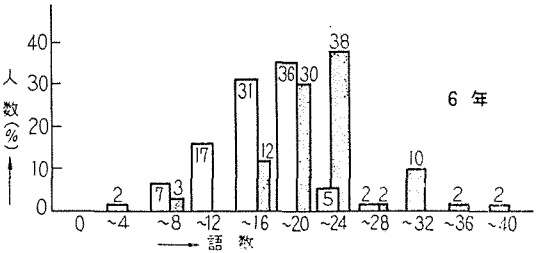

第２種の文を聞いた第１組
第１種の文を聞いた第２組
１　年
人数(%)
語数
0
~4
~8
60
32
57
30
11
10


２　年
人数(%)
語数
0
~4
~8
~12
~16
40
22
29
27
27
19
22
10
2
2


３　年
人数(%)
語数
0
~4
~8
~12
~16
~20
~24
~28
19
12
36
5
26
16
12
16
5
14
2
12
14
2


４　年
人数(%)
語数
0
~4
~8
~12
~16
~20
~24
~28
37
5
2
5
12
11
21
23
12
18
12
20
5
11
7


５　年
人数(%)
語数
0
~4
~8
~12
~16
~20
~24
~28
~32
4
2
11
2
20
28
16
22
9
13
23
2
37
5
5


６　年
人数(%)
語数
0
~4
~8
~12
~16
~20
~24
~28
~32
~36
~40
2
7
3
17
31
12
36
30
5
38
2
2
10
2
2

な　種類だったのから　すこしずつ　今のような　たくさんの　ちがった　種類に　なるまでに　かわって　きたのです。

これについては，ばく然と，「どんな話でしたか。思い出せるだけ書いてください。」と口頭で要求し，自由に書かせた。この結果の整理は，キー・ワード方式によらず，単に語数をかぞえた。語は自立語とし，くり返しのような，無効の記述はかぞえなかった。この語数別による頻度数を相対度数とし，分布状況を柱状グラフに描いた。前問に同じく，第1組が第2種，第2組が第1種の文に当った。

柱の頂点のずれを見ると，2年以外は第1種の文を聞いた第2組のほうがすこしずつ多く書いたことがわかる。

4　まとめ

調査はまだまとめられる段階ではないが，ともかく記述だけをまとめておく。

この報告は，結果を紹介するためではなく，方法の見通しを立てるために行ったものであるから，整理のしかたも，ふぞろいであった。この中で，わたくしがあえてキー・ワード方式と称した分析法を，わたくしは，もっと追求したいと思う。報告した範囲内では，これで何がわかったというほどの結果も出なかったが，この方法は，結果が一目で，質と量とでつかめる利点がある。証明法にはならないが記述法としては有効である。わたくしは，雑誌「文学」の33年6月号で，選挙公報文章の小規模な分析を行った。その折，この方式によって，一つのグループの政治意識の図式化を試みた。

言語効果の問題と取り組むためには，どうしても，社会の一集団の，あることがらに即した意識というものを，具体的にとらえる必要がある。そこから研究が出発すると思うので，あるテーマの実証を急ぐよりも，まず，できるだけ問題を見つけたい。そのために，結果を，なるべく，一目でわかる図式化へもっていく努力をすることが大切であるとわたくしは考える。